

鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動

―了行・道源に関する訂正と補遺―

野 口 実

はじめに

近年、さまざまな研究上の関心から、中世前期における中国、すなわち宋や元との交流・交易に関する研究が目白押しである。たとえば、『鎌倉遺文研究』第二五号（二〇一〇年四月）では、五本の掲載論文のうち三本がそれに該当する。⁽¹⁾

そのうちの一つが拙論「東国武士の在京活動と入宋・渡元―武士論の視点から―」（以下、「前稿」と表記）であり、東国武士（千葉氏一族）出身の僧了行と道源が、京都の権門と関係を持ちつつ經典を求めて宋・元に赴いた事実を、政治・社会的背景を踏まえて説明することにより、当時のわが国の文化状況に対する従来の西高東低的な理解を相対化する必要を指摘したものであった。

「前稿」は、私自身のこれまでの研究領域から逸脱した問題も対象にしているため、この方面における先学諸賢か

らの批正を覚悟（期待）していたのだが、意図したとおり、史料解釈の誤りに対する指摘や見過ごしていた先行研究についての教示を得ることが出来た。その結果、多くの知見を得るなかで、了行より約七〇〇八〇年ほど活動の時代を異にする道源も、その東国における活動の一拠点を下総守護千葉氏の本拠地に所在した千葉寺に置いていた可能性のみとめられることが判明し、中世都市千葉に関する研究とリンクする材料が得られたのは僥倖であつた。⁽³⁾

本稿では、先学からの指摘に従って前稿の誤りに訂正を加え、新たに知ることを得た史料や先行研究の成果に基づいて、了行・道源に関する事実関係についての補足を行い、さらに、彼らの活動と深い関係のみとめられる下総千葉寺とその所在地である中世都市千葉の有した機能についても考えてみたい。

一 了行と九条家

前稿執筆の後に知ることを得た了行に關説した論文は、かつて東寺藏「宋版一切経」の行間に了行の名のあることを教示頂いた牧野和夫氏による新稿二点である。

その一は「十二世紀後末期の日本舶載大藏經から齋然将来大藏經をのぞむ」（吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』勉誠出版、二〇〇八年二月）で、これには、滋賀県金剛輪寺で発見された「観音玄義科」の奥書によつて、了行の渡宋が一二三五年頃であることが確実になったことを紹介した上で、了行が宋代の出版事業において九条道家と関係することの推測を可能にする記事が『法然上人絵伝』第三十五巻に見えることが指摘されている。了行が渡宋した年は、道家が「かた木を異朝にひらかせられて摺写の弘通を」期した「文暦第二歳乙未」に当たるといっているのである。

その二は「中世前期学僧と近世書写一寺院縁起をめぐる二、三の問題——意教上人頼賢を軸に——」（『実践国文学』第

七六号、二〇〇九年一〇月）で、摂家將軍頼經の崇敬を得た意教房頼賢が法華山寺による宋版一切経補刻事業の一翼を担って入宋した時期が、了行のそれに重なることから、九条家を媒介とする両者の繋がりが想定されることを指摘され、また、建長六年（一二五四）に如意寺宮作のために寄進された「了行法印所造置京都之持仏堂、并宿所等」（「吾妻鏡」六月二十五日条）が「観音玄義科」奥書に記された「東洛楊梅大宮一乘弘通之法家」「十一面觀世音菩薩御宿所」に当たることを推測されている。ちなみに、私は「前稿」において、この宿所（左京楊梅大宮の法家）が、『日蓮遺文紙背文書』所見の「大宮御地」^③と同一である可能性を述べたが、牧野氏も同様の見解を示しておられる。

牧野氏の二つの論文によって了行と九条家との緊密な関係が更に明らかになった。とくに『法然上人絵伝』による指摘に従うならば、了行の渡宋はまさに九条道家の意を挺するものであったということになる。了行が「九条大御堂住僧」（『歴代皇記』巻四裏書）に登用されたのも道家の力によることは疑いのないところであろう。

しかし、道家は寛元四年（一二四六）七月に子息で前將軍の頼經が鎌倉から京都に送還され、ついで関東申次のボストも西園寺実氏に取って替わられており、さらに宝治合戦後の段階では、孫の頼嗣が將軍に在任しているとはいえ、政界における勢威はほとんど失っていた。「前稿」において、私はこの点に関する認識が甘かったようである。

すなわち、私は「前稿」一（二）②「閑院内裏造宮関与の背景」において『岡屋閑白記』建長元年（一二四九）二月二十一日条から、

禪閣被談曰（中略）——又曰、閑院被造宮者、差図可被仰誰人哉、先度承元造宮之時、松殿可承之由時人存之、

先例有職人承之故也、近則法性寺殿令承之給、或時者雅頼卿承之、余答云、今度事未承、承元誰人承之哉、禪

閣咲云、預法師于時称指図房、件法師示合或者奉仕之、仍於公事無便宜、今度尤可被引直歟、

の部分を用いし、『日蓮遺文紙背文書』に見える、閑院内裏造宮に關して了行に指示を与えた（おほせられ）た「九条殿」

を道家と誤認した上で、当時の渡宋僧の多くが建築技術を学んで帰朝している事実を踏まえて、ここに見える「指

図房」こそ了行に比定されるのではないかと考え、これと示し合わせた「或者」を九条道家と考えてしまったのである。

二〇一〇年六月十九日、上横手雅敬氏は、龍谷大学大宮学舎で開催された佛教史学会の入門講座における講演「九条道家と東福寺」の中で、「前稿」のこの部分をとりあげられ、以下(a・b)のような批判を加えられた。

a 九条道家は、建長の閑院内裏修造の時点では「すでに退官し、しかも謹慎状態」にあったのであるから国家的な修造事業に関与するはずがなく、『中山法華経寺史料』（『日蓮遺文紙背文書』）に、閑院内裏西対の造営に際して了行がその意を受けたことの見える「九条殿」は九条道家に比定できない。

b したがって、『岡屋閑白記』建長元年二月二十一日条の道家と近衛兼経の対話も「のんびりとした世間話ばかりで、生臭い話はない」のであり、「余答云、今度事未承、承元誰人承之哉、禅閣咲云、預法師于時称指図房、件法師示合或者奉仕之、仍於公事無便宜、今度尤可被引直歟」の解釈は、「兼経が『承元の時』は誰が承りましたか」と聞いたのだから、道家の答えも承元の思い出である。『指図房』という法師が或者と相談してやつたので公事については不出来だ。だから今度は修正しなければいけない」といった」となる。

まことに当を得た明快な指摘で反論の余地はなく、その場で聴講していた私は、当該期の政治状況に関する理解の不足と短絡的な思い込みによる史料解釈を恥じ入るばかりであった。

かくして「前稿」に訂正を加える必要が生じたわけで、そのために、記録研究の先達である高橋秀樹氏に意見を求めたところ、大略以下(c・e)のような教示を頂くことが出来た。

c 出家後の道家は、基本的に「東山入道」「東山禅閣」と呼ばれており、順当に考えれば、「九条殿」は右大臣の藤原忠家に比定される。

d 「或者」について。道家は閑院内裏が焼けた承元二年（二〇八）には権大納言左大将で十六歳、造営が行われた建暦年間でも二十歳に至らない年齢なので「有職人」には該当せず、彼に比定するのは無理である。そこで、注目されるのが『玉葉』建暦二年（二二二）二月二十四日条の「宰相中将来、…談云、閑院可被遷遠大内、便宜指図上皇宸作云々、已遣閑東了、七月以前遷幸云々、甚神妙々々」という記事で、「或者」とは婉曲に後鳥羽院を示す表現と推測される。したがって、指図は後鳥羽院の指示を受けた「指図房」が作ったことになる。

e 『経後卿記』建長三年六月二十七日条には、「造作間事、（西園寺実氏）前太政大臣一向被計沙汰」とある。実氏は閑東申次であった。「九条殿」（忠家）がどのような立場で了行に「おほせられ」たのかについては、道家—頼嗣の關係だけで割り切れるものではなく、忠家が造内裏（行事所）に関与していたのか、知行国主や荘園領主として間に入ることはなかったのかなどを確認する必要がある。

以下、高橋氏の教示を踏まえて上横手氏の批判に対応する形で、前稿の内容に訂正を加えたい。

a については、高橋氏の教示（c）に明らかなように、「九条殿」は道家の嫡孫である忠家に比定されるべきであった。ただし気になるのは、講座の質疑応答において米澤隼人氏が指摘されたように、閑院内裏と同時期に幕府が関与して行われた蓮華王院の修造に道家が参画していることである。上横手氏は、蓮華王院造営は国家的な事業ではないから可能であったとされるが些か腑に落ちない。宝治合戦後から建長の政変に至る間の九条家の立場については、あらためて検討の余地がのこされているように思われる。

b については、私の解釈は無知と予断に基づくもので、明らかに上横手氏の解釈が正しい。また、高橋氏の教示（d）により、「或者」を道家に比定するのが不可能であることは明白であり、撤回させて頂きたい。しかし、承元の内裏造営に「指図房」と呼ばれる法師が参画したことは重要で、建長の造営に了行が同じような立場にあった可能性ま

では否定できないであろう。あるいは、了行が建長の開院内裏造営に関係したのは、九条家との関係以前の問題として、渡宋経験を背景にした彼の建築技術者という側面が大きくあずかっていたのかも知れない。

二 道源に関する新知見

道源に関する先行研究としては、坂口太郎氏の教示によつて、落合博志『徒然草』に関する考察二題——第六十七段・第百七十九段——（『法政大学教養部紀要』通巻第九〇号、人文科学編、一九九四年二月。以下、落合氏の所説はすべてこれによる）と高橋秀栄「心慶手沢本『義科私見聞』——中世関東天台学の一資料——」（『駒澤大学佛教学研究紀要』第五九号、二〇〇一年四月）、同「平安・鎌倉時代の天台僧——金沢文庫の聖教から拾い集めた要文記事——」（『駒澤大学佛教学研究紀要』第四〇号、二〇〇九年二月）のあることを知ることができた。

（一）『徒然草』・『摺拾集』・『顕密円通成仏心要』識語に見える道源

落合氏の論文は、その副題にあるように、『徒然草』の二つの段の内容に関して考証を加えたものである。

『徒然草』第百七十九段には、

入宋の沙門、道眼上人、一切経を持来して、六波羅のあたり、やけのといふ所に安置して、ことに首楞嚴経を講じて、那蘭陀寺と号す。

其聖の申されしは、「那蘭陀寺は、大門、北向也と、江帥の説と言ひ伝へたれど、西域伝、法顕伝などにも見えず、更所見なし。江帥いかなる才学にて申されけん、おぼつかなし。唐土の西明寺は、北向勿論也」と申き。

同 二百三十八段には、

那蘭陀寺にて、道眼聖談義せしに、八災と云事を忘れて、「是か覚え給」と言ひしを、所化皆覚えざりしに、局の内より、「これくにな」と言ひ出したりければ、いみじく感じ侍き。

とあるが、落合氏はここに登場する「道眼上人」が、鎌倉後期の播磨書写山の学僧が編集した『拈拾集』（兵庫県史料編四『収録』）の記事によって、千葉一族の道源と同一人物であることを論証された。⁹⁾すなわち、『拈拾集』の「唐本一切経事」には、

一 当山一切経藏安置唐本青表紙御経事

右唐本者、千葉道源房云僧、発一切経将来之願、申論旨渡唐、渡二部之一切経之处、或时起難風、俄及唐船漂没、雖投船中之财宝、風不息、爰彼一切経一部沈時、浪風如元靜畢、船中諸人云、此一切経深龍神望給処也、不及猶預、可被沈之一同、爰道眼房云、依 綸言所渡申者也、縦波浪没不可叶^云、則風息畢、以此御経可爾靈場為奉納^云、其時不知当山此子細、其後彼仁、洛陽東山六波羅蜜寺南、焼野云所建立一寺、称那羅陀寺、奉納彼寺、其後当山東坂本和氣大学介籌策漸々寄進、当寺之分二千余卷也、爰道源房円寂、其後大学介又死去、彼弟子僧等、一部二部取散、三千余卷空散失畢、当山観実房猷秀僧都雖廻諸方計略、本寺无正鉢之上、元弘已来動乱相続之間、不及是非、又黄表紙唐本在之、施入人不知之、此内百卷広瀬被取之^云、修乗坊春尊堅者、夏講一和尚時、唐本書本撰分、造棚改箱致興行、夏講中一切経輕読、此時始之、為弘虫也、

（本稿への引用に際して、捨て仮名・送り仮名・返り点は省略）

とあり、その内容が『徒然草』の記事と合致することから、「道眼上人」が「千葉道源房」と同一人物であることを指摘されたのである（ちなみに、『徒然草』第百七十九段には「入宋の沙門、道眼上人」とあるが、落合氏によれば「入元」とす

べきものも、『徒然草』をはじめ、当時の慣用では「入宋」「渡宋」と表記されることがある。

さらに、落合氏は、道源（道眼）の一切経請来を伝える史料として、夙に熊原政男氏によって紹介されていた金沢文庫所蔵の『顕密円通成仏心要』識語（延慶元〜二年湛睿写の校合識語。『金沢文庫古文書 識語篇』）にも注目された。以下にこの史料を掲げておこう。

（本冊）

延慶元年^{戊申}十一月十一日申剋書之、依為大卷私分之本末、後写之者応知、

華嚴末資湛睿<sup>通十四
俗三十八</sup>

（以下本）

延慶二年^{己酉}比、有入唐之禅侶、名道眼房、奉渡一切経之時、適感得此書印本、同亦渡之、然与和国流传之古本少有同異、故今校合之、即以朱砂点出之、並是新渡宋本也、若有後写者、努力莫混和兩本、先純写一本、更点付一本矣、

于時正和三年^{甲寅}九月五日、於泉州久米多寺記之、

貧道沙門湛睿<sup>通廿
俗四十四</sup>

（末冊）

夫仏立教相止為奉行、其時奉門散在経論、若失旨帰、則進行闕発足、若得要門、則悟入在立地、而今顕密成仏心要者、紕解行之紊緒、断顕密之階畔、先見筆跡、宛如面会、重思義理、猶似指掌、高判解尺、其数雖多、分明的示、不如此書、可謂千載一遇而已、仍書写備左右、私調為兩卷、是由大卷也、後写者応知、于時延慶二年^{己酉}二月廿三日、於鎌倉郡龜谷書写之了、

花嚴宗末資湛睿<sup>通十四
俗三十九</sup>

延慶二年^(以下本)西比、有渡宋之禅客、名道眼坊、奉渡一切經之時、適感得此心要兩卷、即同渡之、然与和国流传之古

本少有同異、故今校合之、以朱砂点出之、並是新渡宋本也、若有後写者、努力莫混雜兩本、宜先純写一本、更点付一本矣、于時正和三年^{甲寅}九月七日、於泉州久米多寺記之、

貧道沙門湛睿^{通計 俗四十四}

落合氏は、この識語の記事を前提として、千葉氏と金沢北条氏とが姻戚関係を結んでいたことや、千葉寺と称名寺との学僧の往来が盛んであったことに、道源と湛睿・兼好との結びつきの手がかりを見出されたのである。

坂口太郎氏は、この落合氏の論文の存在を私に教示された際、「落合氏は少し疑問を持たれているが、『拈拾集』に道眼が「申論旨渡唐」したとあるのは、『釈尊影響仁王經秘法』奥書に見える「西園寺太政大臣実兼、投三千五兩ノ金ヲ、鹿島淨行千葉道源、為遣唐使遣異朝」という記事と何らかの関係があるのではないかと思われ、興味が惹かれる」という旨のコメントを付せられたが、同奥書には「異朝天子大元王萬臣將軍為勅使。打開国清寺大藏。隋煬帝勅封ノ切解釈尊影響告勅秘録七二卷御書送本朝。希代勝事」ともあり、これまた「申論旨渡唐」の結果である事を想定できるであろう。

大塚紀弘氏は、平安末〜鎌倉期において宋版一切經の輸入・寄進の主体が公家から幕府へと比重を移したことを指摘され、「京都の西園寺氏も関東申次で、鎌倉幕府と密接な関係にあった」と述べておられる。^⑩これを踏まえるならば、道源の渡元は、唐物将来という経済的目的の要素の大きい公武協調の事業として行われたことになる。ちなみに、「前稿」で明らかにしたとおり、道源は御家人であるとともに広域的な商業活動にも通じた人物であった。

さて、落合氏の整理にもよりながら、「前稿」の成果と上掲の史料によって道源の活動に関係する事柄をまとめる以下のようなになるであろう。

① 道源は下総の御家人木内氏（千葉氏一族。鹿島社と香取社の間に位置する潮来を中核として香取海周辺で展開していた流通経済の担い手）の出身で、小見郷を本領として「小見四郎左衛門尉胤直」と称した。

② 鹿島神宮寺の浄行僧としての身分をもち、一切経請来のために論旨を申し請け、西園寺実兼の経済的援助によって渡元した。

③ 一切経のほか、『釈尊影響仁王経秘法』『顕密円通成仏心要』などの經典を日本に請来したのは延慶二年（一二〇九）のことであった。

④ 帰国の船には二部の一切経を積載したが、途中で難風に遭遇し、船の沈没を回避するために一部を海中に投じた。

⑤ 請来した一切経は、道源が六波羅の焼野に建立した那蘭（羅）陀寺に納めたが、播磨国書写山円教寺の東坂本に住む和氣大学介（助）の仲介によって、道源の在世中に少しずつ円教寺に移譲された。

⑥ 道源は那蘭陀寺で講経談義を行い、ことに『首楞嚴経』（一名、『中印度那爛陀大道場経』）を講じた。

⑦ 道源は円教寺に一切経のうち二千余巻が譲渡された時点で没し、その後、和氣大学介（元弘三年（一二三三）の生存が確認される「落合氏論文参照」）も亡くなったために移管が停止され、那蘭陀寺にのこされた一切経は道源の弟子たちによって少しずつ寺外に流失して、すべて散佚。寺も破滅状態に陥った。

⑧ 正和三年（一二三四）九月、湛睿は和泉国久米多（田）寺において『顕密円通成仏心要』の在来の古伝本と道源請来の新本を校合した。

⑨ 元応元年（一二三九）の文書には、「木内四郎左衛門入道道源」と所見し、淡路国由良庄の地頭であった。

本領下総國小見郷における活動の過程で鹿島神宮寺の浄行僧の身分を得ていた道源は、西国所領経営のために在

京する機会が多かったが、何らかの機縁によって西園寺実兼と接触し、その援助を得て一切経をはじめとする唐物の将来を目的に元に渡る。そして延慶二年（一二〇九）、数千巻におよぶ一切経と『釈尊影響仁王経秘法』などの經典をともなつて帰国すると、六波羅に那蘭陀寺を建立して一切経を納め、ここで講経談義を行った。

上記①～⑨を更に要約すると以上のようなことになるであろう。西園寺氏と道源との間に關係が結ばれた契機については「前稿」で推測したところである。注目されるのは那蘭陀寺が六波羅焼野の地に建てられたことで、ここにはもともと東国御家人木内（小見）氏の在京宿所が構えられていた可能性が高い。^⑪

熊原政男氏は、湛睿が文保二年（一二三二）春に東山鷲尾金山院にいたことが明らかであり、また『金沢文庫古文書』の「兼好書状」に「當時者罷住東山辺」とあることなどから、両者は東山在住時代に知り合いの關係となつたのではないかと述べ、また、③の事実や、兼好が『徒然草』に道源の話を書いたことを踏まえて、湛睿・兼好・道源の三者の間に何らかの繋がりがあったことを推測されている。^⑫一方、落合博志氏も、「兼好が道源と面識があり、それも単なる知人というのではなく、例えば清閑寺僧正動我との關係ほどではないにせよ、或る程度近い間柄にあったことが知られる」と指摘されている。

兼好は六波羅探題に任じた金沢貞顯（乾元元年（一二〇二）～延慶元年（一二〇八）・同三年～正和二年（一二三二）在任）に近い存在であったから、道源をはじめ、その交遊グループには六波羅關係者が多かったのである。^⑬まさに、武士における「『二所傍輩』のネットワーク」と同様な關係が、彼ら文士・僧侶たちの間にも形成されていたことが知られよう。^⑭

(二) 千葉寺と道源

高橋秀榮「平安・鎌倉時代の天台僧——金沢文庫の聖教から拾い集めた要文記事——」の「道眼房」の項目には、前掲の『顕密円通成仏心要』識語（通廿／俗四十四（八五函））と以下に掲げる三五〇函「義科私見聞」の一節が示されていた。

付之、師云、尺論ノ談義ノ之時、セイシム房ハ不ト空云々。道眼房ハ空スト云々。尋云、此等ノ二人ノ意ハ、如ク天台宗ノ約シテ三諦ニ、一空・一切空等ノ意ヲ以テ、論ル空・不空ノ義ヲ歟。如何。

『義科私見聞』の全文は、すでに高橋氏自らが「心慶手沢本『義科私見聞』——中世関東天台学の一資料——」で翻刻・紹介されているが、その解説によれば「下総国埴生莊の龍角寺の天台僧である良達房心慶がまとめた、天台の学匠（比叡山から東国に下向した僧侶）による、正和・文保ころの談義・講説の学習ノート」（坂口太郎氏による要約）である。⁽¹⁵⁾

高橋氏は、同書「即身成仏義」の料簡の文末に、「師云、已下ハ千葉寺ニシテ八講之時ノ論義也」という記事のあることから、下総千葉寺における講義とみて疑いないとされている。この点について、坂口太郎氏からは、他にも「今師於千葉寺ニ初被談之時ハ……」（翻刻の三五五頁）という記載のあることから、高橋氏の見解はまず揺るがない旨の教示をいただいた。⁽¹⁶⁾

ちなみに、比叡山から東国に下向し、千葉寺において談義・講説を行った碩学について、高橋氏は南樂房維仙か、もしくはその弟子に比定されているが、その講説に見える「尺論ノ談義ノ之時、セイシム房ハ不ト空云々。道眼房ハ空スト云々」の「尺論ノ談義」が何処で行われたのかは不明である。落合博志氏は、過去に千葉寺の了行が入宋を遂げたという事実から、道源が千葉寺の出身ではなかったかという想定を示されたが、千葉寺における講説で道眼房（道源）の名が挙げられていることは、その可能性を補強することになるだろう。

千葉寺は、現在の千葉市中央区千葉寺町、西に東京湾を臨む標高二〇メートルほどの台地上に立地する。この寺

は考古学的な調査から八世紀前半に建立されたことが知られ、十二世紀後半に造営された経塚も検出されている。中世には守護千葉氏（千葉介）の氏寺として崇敬と保護をうけたと伝えられており、それは金沢文庫所蔵の聖教類の奥書から金沢称名寺系の僧侶の盛んな活動がうかがわれることや、境内にのこる銀杏の大樹から裏付けられる。現在の宗派は新義真言宗（山号は海上山）であるが、行基開創の伝承から鎌倉時代は真言律宗に属したと思われる。下総における教学の中心寺院の一つであった。⁽¹⁷⁾ このような寺院には各地から出自を異にする僧が集まったことであろうが、千葉氏の氏寺の住僧にふさわしいのは、やはり、まず、千葉一族ないしは千葉介被官の出身者であろう。

落合博志氏も、その出自を明らかにされないままに傍証とされたが、千葉一族で千葉介の被官であった原氏出身の了行が、宋版一切経の福州開元寺版『大涅槃経』に、「日本国下州千葉寺比丘了行捨」の刊記をのこすに至った事実、また、時代は降るが、文明十七年（一四八五）閏三月二十一日付「日光坊昌範置文」（明通寺文書、『小浜市史』社寺文書編）に、千葉氏一族の白井氏の娘を母として下総国白井庄に生まれた昌範が千葉庄で成長したとの記述があること⁽¹⁸⁾とを敷衍して考えるならば、千葉一族木内氏の出身である道源もまた、千葉寺と何らかの関係を有したとみてよいのではないだろうか。

三 千葉庄の機能と中世都市千葉

千葉庄は、下総守護千葉介（千葉氏惣領・家督の伝統的称号）の本領であるが、荘内の田辺田（田部田・多部田）郷や武石郷には一族庶家の所領も散在し、⁽¹⁹⁾また、その外港たる結城浦（千葉湊）は、千葉庄を東西に貫流する都川水系をさかのぼった内陸部と相模の六浦・武蔵の石浜をはじめとする内海沿岸地域を結ぶ流通・交通の拠点であった。⁽²⁰⁾そ

して、千葉介の居館は都川の河口近くの低地に営まれ、その周辺には千葉一族の崇敬する宗教施設も配置されていて都市的な空間が現出していたのである。⁽²¹⁾

(表) 千葉庄内における聖教の刊刻・書写と奉授

聖教	僧	場所	年	刊・写・授
佛説如意虚空藏菩薩陀羅尼經	道忍	(下総国千葉庄堀籠住人)	文永十一年(一二七四)	刊
不動法	釵阿	下州千葉之庄大日堂知客寮	弘安七年(一二八四)	写
荒神供次第	榮賢	下州千葉大日堂長老坊	永仁五年(一二九七)	写
大聖歡喜天儀軌、唐不空訳	榮賢	下州千葉大日堂	正安三年(一二〇一)	写
諸尊秘決	榮賢	下州千葉大日堂長老坊小坊	正安三年(一二〇一)	写
法華玄義私見聞	心慶	千葉之大日堂	応長二年(一二二二)	写
三代別記	秀範	千葉庄堀内禪室	正和元年(一二二二)	授
	聖海	千葉庄堀内禪室	元亨二年(一二三二)	授
	恵釵	千葉庄堀内光明院	暦応元年(一二三八)	授
天台四教義私記	心慶	千葉琰魔堂庵室	文保三年(一二三九)	写
中天集	心慶	琰魔堂庵室	元応二年(一二三〇)	写
対法蔵頌疏抄(第七卷・十二卷)	源山	千葉庄閻魔堂別室	元亨二年(一二三二)	写
(第二十一卷)	源山	下総国千葉庄閻魔堂別院	元亨二年(一二三二)	写
見聞集	心慶	千葉琰魔堂庵室	元亨二年(一二三二)	写
(十不二門) 指要証義抄	心慶	(執筆千葉寺住浄意房)	元亨二年(一二三二)	写
明静類聚抄	源山	下総国千葉庄池田郷横須賀	元亨二年(一二三二)	写

俱舍論頌疏見聞	自受用所居事	心慶	閻魔堂別院	元亨二年（一二三二）	写
	止観大綱鈔	心慶	下州千葉庄閻魔堂別院	元亨二年（一二三二）	写（筆師源山）
持誦	題末詳（不完冊子 五）	源山	（筆師千葉寺住浄意房）	元亨二年（一二三二）	写
		心慶	下州千葉大日堂南面	元亨二年（一二三二）	写
		源山	（執筆千葉寺住浄意房）	元亨二年（一二三二）	写
		心慶	千葉庄堀田柴崎田嶋	元亨二年（一二三二）	写

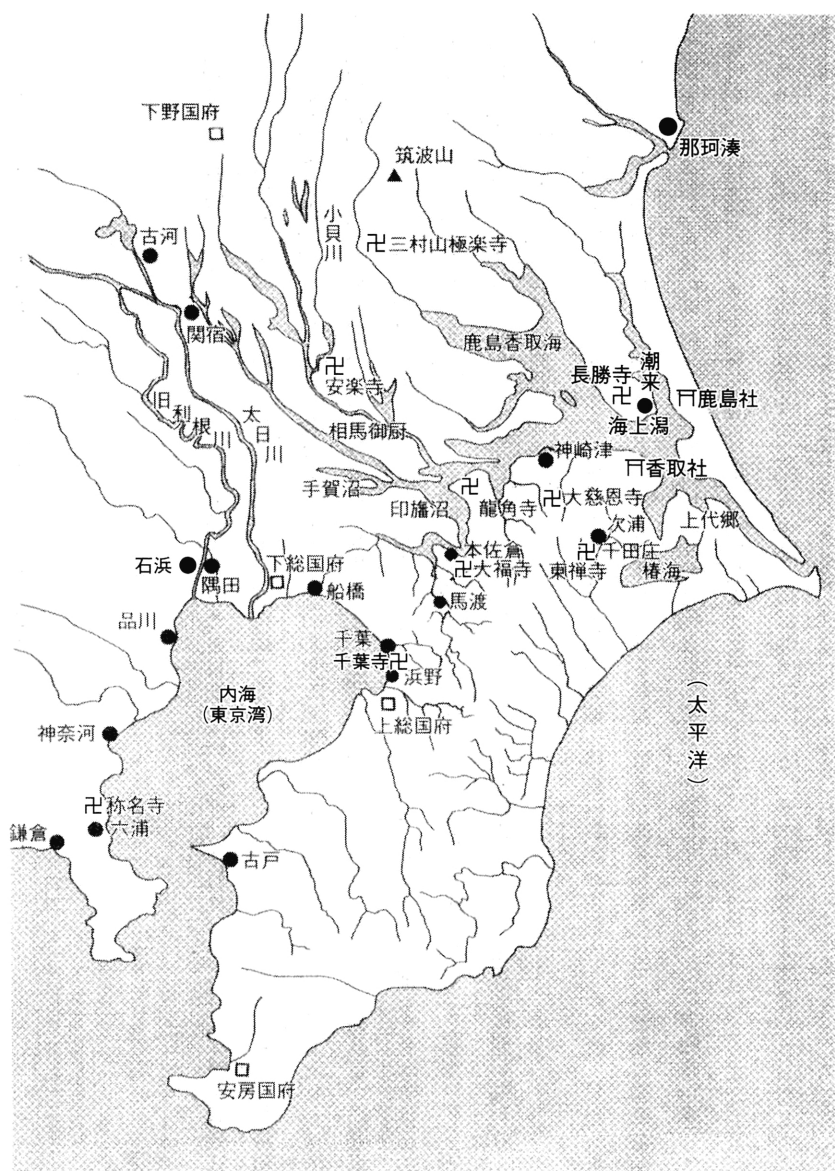
〔小笠原長和「武州金沢称名寺と房総の諸寺」〔同「中世房総の政治と文化」吉川弘文館、一九八五年一月、初出は一九五九年三月〕・高橋秀栄「天台僧心慶・源山の手沢本」〔『金沢文庫研究』第三〇九号、二〇〇二年一〇月〕によって作成〕

鎌倉時代の千葉は、房総半島と三浦半島に囲まれた内海と香取海（鹿島香取海）をつなぐ海陸交通の最短ルートの中継点として重要な役割を担っていたと考えられる。下総における称名寺関係寺院も、このルート上に位置していた。築瀬裕一氏は鎌倉時代の千葉について、「地域的には広くはないが、湊・宿・市場・宗教空間・館などの複数の機能を合わせ持つ場であり、下総守護の本拠地にふさわしい内実を有していた」と評価されている。⁽²²⁾

千葉一族の東胤行（道源の父胤時の従兄弟にあたる）が、美濃国山田庄に一族の守護神である妙見を千葉から勧請した際、これに奉仕するために千葉の住人十二名も移住したという話が伝承されていることも、千葉が千葉一族すべてにとって精神的な結節点としての意味を持つ空間であったことを示すものであろう。⁽²³⁾

政治・経済・宗教などあらゆる点で、千葉の地は千葉氏嫡家の排他的空間ではなく、下総一帯に所領をもつ千葉一族の宿所や出先機関の置かれるような開かれた空間であったと思われる。千葉一族の人々にとって、鎌倉―京都―鎮西、そして大陸への窓口はここに開かれていたと言ってよいであろう。了行・道源は二つの内海を結ぶエリアを超

鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動



〔地図2〕中世の下総とその周辺
(築瀬裕一「中世の千葉—千葉堀内の景觀について—」付図をベースに作成)

えて、西国さらには大陸にまで及ぶ広域活動を展開したのである。

おわりに

本稿執筆の目的は、専ら「前稿」の訂正と補遺を行うことにあった。先ず、了行については、上横手雅敬氏の指摘と高橋秀樹氏の教示を得て「前稿」における『岡屋関白記』の記事の解釈に訂正を加えるとともに、牧野和夫氏の研究から、その渡宋が九条道家の宗教構想に基づいて行われた可能性のあることを付け加えることが出来た。また、道源については、熊原政男氏・落合博志氏・高橋秀榮氏の研究を参照することによって、『徒然草』に登場する「道眼上人」や『金沢文庫文書』に所見する「道眼房」と同一人物であること、そして彼と兼好や称名寺関係の学僧たちとの関係が、金沢北条氏をはじめとする関東御家人の在京空間である六波羅で結ばれたことが明らかとなった。さらに、下総千葉の都市機能について、主に築瀬裕一氏の研究成果に学びながら了行・道源との深い関わりを前提にして再評価を加えることができた。

とりわけ道源については新知見が多く、兼好や金沢称名寺の学僧・播磨円教寺の和氣氏との交流、泉州久米田寺との関係などから、彼の存在形態の多様な側面が浮き彫りにされた。道源が渡元を果たし、六波羅に那蘭陀寺を開いて講経談義を行った後の時点でも、淡路国由良庄の地頭として史料に登場していることには違和感を感じざるを得ないが、これは明らかな事実として受け止めなければならないのである。

ところで、久米田寺は了行が住僧をつとめた九条御堂の末寺であるが、その別当職を安東蓮聖が買得したことはよく知られている。蓮聖は得宗家の在京被官として西国各地における経済活動で大きな活躍を見せた「有徳人」だが、

その姿は道源によくオーバラップするのである。ちなみに、湛睿が正和三年（一二三四）九月、久米田寺で自らの手沢本と道源が元から請求した『顕密円通成仏必要』の校合を行っていることは前述したが、この湛睿こそ、久米田寺華嚴経学を東国に伝えた功労者なのであった。⁽²⁶⁾

金沢称名寺の学僧の房総半島諸寺における活動について多くの研究をのこされた小笠原長和氏の論文に、このようない節がある。

年貢輸送の便船が出航すれば、学僧がこれに便乗して東京湾上を往来したし、交通路線上の要地には必ず寺院があつて、寺領経営上の事務連絡の中継点ともなり、また学僧の研究活動の拠点として、巡礼行脚僧の足溜りとしての機能を果たしていたのであるから、この意味では、文化の伝流と経済の関係において、両者がほぼ共通の路線上を歩いていたともいえよう。⁽²⁶⁾

この理解は、京都・西国、さらには宋・元に及ぶ行や道源ら学僧たちの活動にも敷衍できるであろう。

稿を閉じるにあたって、気になる存在がある。それは、道源とほぼ同時代に生き、同じように渡元して、帰国後六波羅建仁寺の住持となつた禅僧龍山徳見（一二八四～一三五八）である。『真源大照禅師龍山和尚行状』（『続群書類従』第九輯下）によると、彼は千葉氏の出身で、下総国香取郡に生まれたという。⁽²⁷⁾香取郡周辺の千葉一族で京都と関係の深い存在といえ、道源を生んだ木内・東氏を想定するのが順当で、当然、道源ともなんらかの交渉があつたと考えられるからである。しかるに、彼の名は千葉氏関係の一次史料のみならず、後世に成立した系図にもまったく所見がない。そのあたりのことの説明を今後の課題の一つとして、ひとまず擱筆することにした。

- (1) 後掲の拙論を除く二本の論文は、大塚紀弘「宋版一切経の輸入と受容」と中村翼「鎌倉幕府の『唐船』関係法令の検討」「博多における権門貿易」説の批判的継承のために―」である。
- (2) 山本信吉「宋版一切経にみえる日本僧の刊記」(『古典籍が語る―書物の文化史―』八木書店、二〇〇四年、初出一九七七年)には、了行に「りようこう」とルビを付している。
- (3) 中世都市としての千葉に関する研究の到達点は、築瀬裕一「中世の千葉―千葉堀内の景観について―」(『千葉いまむかし』第三号、二〇〇〇年三月)に示されている。
- (4) 「西心カ書状」(『千葉県の歴史 資料編中世2』中山法華経寺文書Ⅰ「秘書要文」紙背文書一九)。
- (5) 「某書状」(『千葉県の歴史 資料編中世2』中山法華経寺文書Ⅰ「双紙要文」紙背文書一三)。
- (6) この「九条殿」が道家ではなく、その孫にあたる忠家に比定されるべきであることは後述の通りである。最初にこの「九条殿」と了行の関係に注目された石井進氏も、「九条殿」を道家その人に比定するような誤りは犯されていない(『日蓮遺文紙背文書』の世界―「双紙要文」紙背文書を中心に―)(『石井進著作集 第七卷 中世史料論の現在』岩波書店、二〇〇五年、初出一九九一年七月)。私はこの論文を参照しながらも、当時の九条家のおかれていた状況を理解していなかったために九条家と道家と短絡させてしまったのである。ここに、了行に関する旧稿すべてに遡って訂正させていただく次第である。なお、閑院内裏の修造に関する史料は、長村祥知「閑院内裏修造関係史料集(稿)」(平成一八〇平成一九年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書「閑院内裏の政治的研究」研究代表者 野口実、二〇〇八年三月)に一括して提示されている。
- (7) 本郷恵子「公事用途の調達」(同『中世公家政権の研究』東京大学出版会、一九九八年三月)参照。
- (8) 従来の研究としては、三田武繁「摂関家九条家の確立」(同『鎌倉幕府体制成立史の研究』吉川弘文館、二〇〇七年二月、

初出二〇〇〇年一月）がある。

- (9) 熊原政男「入宋の沙門道眼」（『金澤文庫研究紀要』第一号、一九六一年一月、初出一九三四年三月。以下、熊原氏の所論はすべてこれによる）において、すでに『徒然草』の道眼上人と『金沢文庫文書』に「有渡宋之禪客」として所見する「道眼坊」が同一人物であることの指摘はなされていたが、千葉氏の出身であることは明らかにされていない。また、落合論文より後出の高橋秀栄「鎌倉時代の僧侶と『首楞嚴經』」（『駒澤大学禅学研究所年報』第七号、一九九六年三月）も、「入宋僧道眼の行状は全く知らない」とする。

- (10) 大塚紀弘「宋版一切経の輸入と受容」。

- (11) 承久の乱の際、道源の祖父にあたる木内胤朝は、幕府東海道軍第五陣大將軍の職務を執行したことにより、大和国宇野庄・淡路国筑佐庄・同由良庄の地頭職を獲得しており（拙稿「慈光寺本『承久記』の史料的评价に関する一考察」京都女子大学宗教文化研究所『研究紀要』第一八号、二〇〇五年三月）、また、『中山法華経寺文書』には、伊賀国久吉名地頭とみられる「おみ（小見）の六郎」の名が所見する（石井進「日蓮遺文紙背文書」の世界）。

- (12) 熊原政男「入宋の沙門道眼」。

- (13) 五味文彦『『徒然草』の歴史学』（朝日選書、一九九七年五月）。なお、兼好が東山に在住したことについては、林瑞栄『兼好発掘』（筑摩書房、一九八三年二月）に詳しい考察がある。

- (14) 武士における「二所傍輩」のネットワークについては、拙著『源氏と坂東武士』（吉川弘文館、二〇〇七年七月）を参照されたい。
- (15) 心慶については、熊原政男「金沢の人々と下総のくに」（『金沢文庫研究紀要』第一号、一九六一年一月）・高橋秀栄「下総龍角寺の天台僧心慶」（『駒澤大学佛教学部研究紀要』第五四号、一九九六年三月）・同「心慶手沢本『義科私見聞』——中世関東天台学の一資料——」・同「天台僧心慶・源山の手沢本」を参照されたい。

(16) 心慶の千葉寺在住の時期について、熊沢氏は「元応元年より元亨二年に至る間の約三ヶ年」とされるが（『金沢の人々と下総のくに』、表）から明らかなように、応長二年（一二三二）に「千葉之大日堂」で、また文保三年（一二三九）元亨二年（一二三二）にも千葉庄閭魔堂で經典の書写を行っており、その期間は、十年ほどになるものと思われる。

(17) 千葉寺については、拙稿「了行の周辺」（『京都大学人文科学研究所『東方学報』第七三冊、二〇〇二年三月）で詳しく触れた。

(18) 外山信司「下総白井氏について」（『佐倉市史研究』第七号・第八号、一九八七年三月・一九八八年三月）参照。

(19) 拙稿「上総氏と千葉氏」（拙著『坂東武士団の成立と発展』弘生書林、一九八二年二月）参照。

(20) 小笠原長和「東国における学僧の活動—金沢文庫古文書を中心に—」（『地方史研究』第七三号、一九六五年二月）。

(21) 築瀬裕一「中世の千葉—千葉堀内の景観について—」参照。ちなみに、『金沢文庫文書』に所見する当該期の千葉における宗教施設の位置に関連する築瀬氏の見解をまとめると以下のとおりである。

① 古代の千葉郡衙は千葉寺（千葉市中央区千葉寺町）から、その北方三〇〇ほどに位置する新田遺跡（中央区葛城。官衙系の大建造物跡と推定される遺構が検出されている）にかけての台地上にあったと想定され、中世の千葉はこの辺りを基盤に形成されたと推定される。

② 都川河口の結城浦（千葉湊）は、もともと千葉郡衙に付随する郡津であったものと考えられる。

③ 千葉氏の館は、都川河口に近い、現在、千葉地方裁判所（中央区中央四丁目）のある地点に所在したとみてよい。

④ 光明院は海岸近く（現在の中央区神明町）に所在し、神明神社の別当寺として千葉湊を管轄したと考えられる。

⑤ 大日堂は千葉館に付随する寺院とみられる。

⑥ 横須賀閭魔堂の所在地は、現在の中央区生実町横須賀に比定される。

⑦ 堀籠は千葉氏時代、千葉中心部を意味する独立した郷として扱われた。

(22) 築瀬裕一「中世の千葉―千葉堀内の景観について―」。

(23) 伊藤一男「美濃千葉氏と妙見社の星祭 岐阜県大和村明建神社の七日祭」(『千葉文華』第一五号、一九七九年一〇月)・同「妙見信仰と千葉氏」(『崙書房』一九八〇年五月)。

(24) 川合康「治承・寿永の内乱と和泉国」(『岸和田市史 第二巻 古代・中世編』一九九六年三月)、同「久米田寺免田の確立と九条家」(同)。

(25) 以上、久米田寺と安東運聖については、川合康「久米田寺の「復興」と安東運聖」(『岸和田市史 第二巻 古代・中世編』)ならびに、永井晋「平姓安東氏の研究―安東運聖像の再検討を中心に―」(『北条氏研究会編『北条時宗の時代』八木書店二〇〇八年五月)を参照。ちなみに、「前稿」において、道源を生んだ木内氏が香取海を中心に金融にも及ぶ積極的な経済活動を展開していたことを述べたが、千葉一族の周辺には他にも同様の存在が見られる。『中山法華経寺文書』に所見し、千葉専属の借上と想定されている「すけの馬允」がそれで、私はこの人物を千葉一族の粟飯原俊定に比定できるのではないかと考えたことがある(拙稿「東国武士西遷の文化・社会的影響―肥前千葉氏・美濃東氏などを中心に―」拙編『千葉氏の研究』名著出版、二〇〇〇年五月、初出一九九七年二月)。木内氏出身の道源が鹿島社と関係を持ち、西国所領の経営を行った実績を背景として西園寺氏の援助を得て渡元を実現した事実を踏まえるならば、千葉介家の経済を支えたこの「すけの馬允」も道源と同じような身分・階層にその出自を求めることが出来るのではないだろうか。

(26) 小笠原長和「東国における学僧の活動―金沢文庫古文書を中心に―」(『地方史研究』第七三号、一九六五年二月)。

(27) 河村晃太郎「二人の入元僧―龍山徳見と雪村友梅―」(『アジア文化交流研究』第一号、関西大学アジア文化交流センター、二〇〇六年三月) 参照。

【付記】 本論の冒頭に述べたように、近年、仏教史・東アジア交流史・中世文学のジャンルにおいて入宋・渡元僧に関する研究は活

況を呈している。しかし、彼らの国内における政治的な立場や渡航に至る背景などには、あまり関心が払われることがないようである。また、各ジャンルの研究が相互に没交渉で進められている現状は、きわめて非生産的であるといわざるを得ない。この点、本稿の執筆に際して痛感したところであつたので、ここに書きとどめておきたい。なお、本稿は京都女子大学宗教・文化研究所平成二一年度共同研究「地方武士の在京と文化の伝播（法然・親鸞登場の歴史的背景に関する研究Ⅰ）」（研究代表者：野口実【研究協力者】岩田慎平・鈴木絵里子・長村祥知・畠山誠・満田さおり・山岡瞳）の成果によるものである。成稿にあつては、坂口太郎氏より先行研究と資料について多くの御教示と御高配を頂いた。また、高橋秀樹氏は『岡屋関白記』建長元年四月二十一日条の解釈などについて懇切な御教示を下さった。このお二人に対し、記して謝意を表する次第である。

〈キーワード〉

入宋僧 千葉寺 了行 道源